

# 個人研究発表 要旨集

## 1日目

### 第一会場（日本キリスト教史①）

松本周 松本のぞみ 李元重 三輪地塩

### 第二会場（歴史神学）

角田佑一 野邊晴陽 山田望 辻学

### 第三会場（組織神学）

高木政臣 藁科智恵 朴大信 堺正貴

### 第四会場（牧会神学・実践神学）

家山華子 中井珠恵 藤原佐和子 朝香和己

## 2日目

### 第一会場（日本キリスト教史②）

本多逸夫 神山美奈子 洪伊杓

### 第二会場（聖書学）

山吉智久 堀忠 岩寄大悟 早藤史恵

### 第三会場（宗教哲学）

正田倫顕 加藤哲平 加藤喜之 平出貴大

### 第四会場（実践神学・社会思想）

三輪摩耶 今出敏彦 徳田信

※上記の各会場の分野名は、目安として大会実行委員会がつけたもので、発表者自身の意図に拠るものではありません

※発表者の所属・氏名表記などは、いずれも発表者による表記に拠るものです

# 1 日 目

1 日 目 第一会場 午前 1

## 柏木義円における祈り理解

日本基督教団中京教会牧師 松本 周 (Shu Matsumoto)

### 〈研究目的〉

日本における初期プロテスタント・キリスト者たちは、キリスト教信仰における祈りの特徴や独自性をどの点に見出したのであろうか。今回の発表では柏木義円に着目し、彼の文章の中で祈りがどのように理解され、また柏木の祈り理解と、「上毛教界月報」等での社会評論や主張との間に、どのような思想的連関が所在するのかを分析する。

### 〈学術的背景〉

発表者は以前にも、日本基督教学会学術大会での研究発表にて日本における初期プロテスタント・キリスト者の祈り理解について取り上げ、特に植村正久について論じた。その際の問題意識と視点を継続しつつ、今回も日本の初期プロテスタント・キリスト者のひとりである、柏木義円における祈り理解を考察する。具体的な分析対象としては、伊谷隆一編『柏木義円集』（未来社）第一巻・第二巻に収録された文章を中心とし、また飯沼二郎・片野真佐子編『柏木義円日記』（行路社）も参照する。加えて柏木の記述の時代的また社会的背景を把握するために、柏木の文章の多くが初出する「上毛教界月報」を適宜参照する。なお仏教の家に育った柏木がキリスト教入信へと至る過程をいわば伝記的に捉えつつ、祈り理解の変遷を観察するという方法も存するが、一回の発表でそれらをも扱うことは困難であり、今回はその部分には扱わないこととする。

### 〈学術的意義〉

本発表の学術的意義は柏木義円の思想について、彼自身のキリスト教信仰の神学的理解から把握しようと試みるところにある。柏木の思想を対象とした複数の先行研究が存在するが、それらは概して「非戦論」や組合教会の朝鮮伝道批判といった柏木の主張から、当時の日本社会の思想的問題を抉り出すものであるか、伝記的事実の積み重ねから柏木の人物像を提示するものである。けれども伝道者として生涯を送り、教会の牧師であることを実存の中心に据えていた柏木義円という人物がどのような神学的理解を有していたかという点を主題的に論じた研究はことのほか少ない。そこには資料的問題も関わっており、柏木が編集者であり事実上の発行責任者であった「上毛教界月報」には時事的問題・社会的問題について論じた柏木の文章が豊富に存在する一方で、柏木自身がそれらの主張が拠って立つところの自らの神学的・信仰的思想について多くは述べていないという事実がある。また、柏木の安中教会を拠点とする伝道牧会活動と、対外的な言論や社会活動がどのような関係にあったのかについても未解明で、今後の課題とすべきことが多い。それらを自覚しつつも、柏木の信仰思想を神学的に捉え、そこから彼の社会・時事評論への連関を捉える試みに、学術的意義が存している。

## 植村環の贖罪思想におけるコンヴァージョン

聖学院大学大学院博士後期課程 3 年次 松本 のぞみ (MATSUMOTO NOZOMI)

### 〈研究目的〉

本研究は 20 世紀のプロテスタント教会伝道者、植村環 (1890~1992) の贖罪信仰による思想をその生涯において探究することを目的とする。おもに環の洗礼の回心に至るまでの教育の原点から環の思想の根底に生きている「キリストの贖罪の犠牲」におけるコンヴァージョンの作用を近代日本思想との対峙と交流において解明し、敗戦の経験から環の伝道者としての生涯に大きな転換をもたらしたことを考察する。

### 〈学術的背景〉

植村環は佐幕派の武士の子から日本初代プロテスタント教会伝道者となった植村正久と文明開化期の教育を受けた季野との間に三女として誕生し、父母の影響を強く受けて洗礼への回心に至った。日本プロテスタント史「第二号の女性牧師」(『女性教職の歴史』日本基督教団出版局) となった環が伝道を開始した頃、日本はすでに太平洋戦争へ向かう軍国主義体制が整えられており、未だ日本女性が参政権を認められていない時代にあつて、日本 YWCA (基督教女子青年会) 会長を担い、戦時下にあつては教会女性の自立を促しその存続を守った。しかし結果的に国家政策への協力となった。環は敗戦の経験から自伝的文章『父母とわれら』より自身の洗礼に至る回心を「コンヴァージョン conversion (心の動きが変わること)」としてとらえているところに特徴がある。それは横浜バンドの祈りの体験を源流とする父母の教えを基盤とし、三位一体 (父・子・聖霊) の神に基づくものである。

### 〈学術的意義〉

まず植村環を研究対象として取り上げることの意義は女性のなかの一人の人生を取り上げるという視点ではなく、植村環という一人のキリスト者としての人格が日本プロテスタント教会の一人の伝道者として実存をかけて生きた経験と思想に基づく歴史的視点に立つことである。とくに日本プロテスタント史において女性伝道者は未だ「女性牧師」という一類型に包括されるという傾向がある。それは日本プロテスタント史に限られたことでなく、それを包含する日本思想史のなかにおける傾向であり、そこにおいて女性が一人の人格として生きる人格形成が未だ確立できていない近代日本の問題点としてとらえ直す必要があると考える。ゆえに環の贖罪信仰による思想をその生涯においてとらえ直し、環の受けた家庭教育の影響を含む幕末から戦後に到る発展深化を辿るなかでその古い心的習慣の克服を目指す考察を試みつつ、その思想におけるコンヴァージョンの普遍性を探究するところに意義がある。その特色はこれまでの日本プロテスタント史において植村環の生涯と贖罪思想に触れた論文がないなかで、環の生涯を取り上げ、その思想が敗戦の経験からコンヴァージョンの深まりにおいて世界平和に向かう普遍性を探究し、近代日本思想との対峙と交流において位置づけようと試みるところにあると考える。

## 魚木忠一の「日本基督教」を再考する—挫折した土着化神学への試み

同志社大学神学研究科 李 元重 (LEE, WONJUNG)

## 〈研究目的〉

本研究は、戦時下魚木忠一が論じた「日本基督教」および「基督教の日本類型」に対する従来の評価、つまり天皇制主義国家への迎合という見解を部分的に退け、それを挫折した土着化神学への試みとして評価し、その現代的な意味を明らかにしようとするものである。

## 〈学術的背景〉

同志社大学神学部でキリスト教の歴史を研究し、教えていた魚木忠一は、『日本基督教の精神的伝統』(1941)、『日本基督教の性格』(1943)などの著作で「日本基督教」、あるいは「基督教の日本類型」の成立を論じた。笠原芳光(1974)と土肥昭夫(1987)は、それを1930年代から、様々な形で提唱された「日本的基督教」および「日本的神学」と同じ類の神学として見なし、キリスト教を日本的なものとして習合させ天皇制国家主義を支えるものとしたと批判した。一方で、熊野義孝(『全集』12巻、1982)や原誠(2005)は、あのような批判から少し距離を置いて魚木を評価しているが、魚木が用いた方法論やその展開の過程などに対しては、詳しく検証していない。そこで、本研究は魚木が論じた「日本基督教」とその方法論、意味、本来の意図、そして限界と問題を歴史的に検証し、土着化神学としての妥当性と現代的な意義を提示する。

## 〈学術的意義〉

魚木の「基督教の日本類型」に対する今までの批判と評価は、正当なものだとは言いがたい。古代からのキリスト教の歴史の研究者だった魚木は、日本人としてキリスト教を体得することは何か、歴史的にどのようにして可能だったのか、それがキリスト教の本質においてどのような意味があったのかという極めて根本的な問いに対して研究したのである。このような問いと答えを検討し、それが時代状況の中でどのように変容し、活用もしくは誤用されたのかを歴史的に検証するのは、戦時下における宗教、とりわけキリスト教の在り方について示すものがあるだろう。

また魚木が取り組んだ一連の問いは、1960年代以降のキリスト教と神学の土着化の問題にもかかわっているし、D. ボッシュが提示した、新しい宣教のパラダイムとして「文脈化」と「インカルチュレーション」とも関連する(1991)。世界宣教委員会(Commission for World Mission and Evangelism in WCC)は、新しい宣教の概念として「周辺からの宣教」を明言したが(Ecumenical Missiology: Changing Landscape and New Conceptions of Mission, 2016)、このようなキリスト教の世界的な流れは、西洋からみて周辺たる日本のキリスト教のアイデンティティと方向性に問いかけるものである。このテーマに対して、日本のキリスト教歴史的からの問いかけの一つとして魚木の研究を分析し、現代のキリスト教に示すものを探る価値があると考えられる。

## 永井隆の殉教観—永井隆における浦上キリシタン「殉教」の「語り」

日本キリスト教会神学校講師 三輪 地塩 (MIWA CHISHIO)

## 〈研究目的〉

永井隆の殉教観について、その「語り」を読み解くことを目的とする。長崎で被爆した経験を持つ永井隆の持つキリスト教信仰の理解が、殉教観、とりわけ津和野殉教物語について著わされた『乙女峠』(1952年)という著作の中に、どのように現れているのかを検証するものである。

## 〈学術的背景〉

永井隆の死生観として真っ先に挙げられるのが「浦上燔祭説」であるが、この説を中心に、原爆被害を「神(天主)の摂理」とするものや、旧約聖書との関連で述べるものなど、多くの語りが存在する。「浦上燔祭説」をめぐる批判は1950年代半ばから見られるようになり、柏崎三郎、田所太郎、山田かん、高橋眞司らの激しい批判に晒されるようになっていく。その反論として、片岡千鶴子や本島等などが永井擁護の意見を述べており、永井の評価は二分されるものとなっている。だが、永井自身の「殉教観」についての研究は少なく、特に永井が「原爆死」と「殉教死」をどのような関わりにおいて理解していたのかの検証はされていないのが現状である。本研究に於いては、この点に着目し、永井がキリシタン殉教物語について書いた唯一の著作『乙女峠』を分析する。

## 〈学術的意義〉

永井隆の死生観については、長崎原爆との関わりの中で、特に「浦上燔祭説」の文脈で語られ、これに対して無数の論文や研究書が著わされている。永井自身は島根県松江の出身であるが、妻縁は浦上キリシタン帰還者の末裔であった。放射線医学に従事し、原爆の被害を受け、43歳という若さで2人の子供たちを残して死を迎えた永井の最晩年の作品こそが『乙女峠』であった。本研究においては、永井の死生観の変遷を繙くと共に、特にキリシタン「殉教」の文脈で捉えることを試みる。「浦上の原爆の語り」については四條知恵の研究、「永井隆における原爆死」については西村明の研究が詳しい。又、永井の発言をキリシタン迫害との関連で語った本島等(元長崎市長)の主張も注目すべきであろう。これらの先行研究や論考によって明らかとなった永井の死生観が、「キリシタン殉教」の「語り」に如何に反映されているか—或いは、反映されていないか—を本研究にて問うものである。

## ビザンティオンのレオンティオスのキリスト論における位格的合一の構造

上智大学神学部 角田 佑一 (TSUNODA YUICHI)

### 〈研究目的〉

本発表の目的は、ビザンティオンのレオンティオス(485年-543年)のキリスト論において、イエス・キリストの位格的合一がどのような構造を持っているのかを明らかにすることである。とりわけ、神のロゴスのヒュポスタシスにおいて個別的、具体的、現実的存在となったキリストの神の本性と人間の本性がいかに一致し、その一致がこの世界においてどのように具体的に現存しているのかを解明したい。

### 〈学術的背景〉

ビザンティオンのレオンティオスは、カルケドン公会議の後に起きたキリストの位格的合一をめぐる論争を解決するために、『ネストリオス派とエウテュケス派駁論』を著し、まずカッパドキア三教父の三位一体論におけるヒュポスタシスと本性(フュシス)・本質(ウーシア)の定義をキリスト論に応用して、キリストのヒュポスタシスと本性の関係を明確化した。そのうえで、彼は「エンヒュポスタトス」、「アンヒュポスタトス」という新たな概念を導入し、神のロゴスのヒュポスタシスが、キリストにおける神の本性と人間の本性を現実的に具体的な存在として成立せしめていることを明らかにした。さらに彼はキリストにおける両本性の「合一の様式」(τρόπος τῆς ἐνώσεως)という考えを創出し、両本性の一致が、どのように具体的な現実として存在しているのかを解明した。彼のキリスト論は後世の神学者たち(例、証聖者マクシモスら)に大きな影響を与えることになる。

### 〈学術的意義〉

ビザンティオンのレオンティオスはカルケドン公会議後のキリスト論の歴史に決定的な影響を与えた神学者である。それにもかかわらず、世界的にも見ても、彼の思想の全容を探る研究がこれまでなされてこなかった。しかし、近年、レオンティオスの思想が注目され、彼の全著作のギリシア語—英語の対訳版(解説付き)が出版され(Leontius of Byzantium Complete Works. Edited and translated by Brian E. Daley. Oxford: Oxford University Press, 2017)、彼の神学の全体像を解明する研究が始まりつつある。日本においても、ビザンティオンのレオンティオスについての研究書や論文はそれほど発表されておらず、彼の思想に関する研究はまだ進んでいないように思われる。そこで、本発表においてビザンティオンのレオンティオスのキリスト論の内容を解明し、日本における彼の神学の研究とカルケドン公会議後のキリスト論研究に寄与したいと考える。

## 愛による法の基礎づけ—トマス・アクィナス『十戒講話』による

東京大学 野邊 晴陽 (NOBE Haruhi)

## 〈研究目的〉

本研究は、トマス・アクィナス(1224/25-74)の最晩年の著作『十戒講話 (Collationes de decem praeceptis)』を扱う。連続説教の記録とされる同著が、人間が従うべき四つの法を意義づけ、また基礎づけるものとして「愛」を強調している点に注目し、必ずしも哲学的・論理的ではないしかたで語られる法と愛との関係を再整理する。

## 〈学術的背景〉

『十戒講話』を含むトマスの聖書註解や説教は研究の遅れが指摘される。しかし、この著作に見られる簡素ながら体系的な記述は、研究者でもあり説教者でもあったトマスの姿を伝えており、キリスト教を不可欠の要素とするスコラ哲学の実像を知る上で重要である (cf. J.-P. Torrell, "La pratique pastorale d'un théologien du XIIIe siècle," *Recherches Thomasiennes*, J. Vrin, 2000)。本研究は同著作の冒頭に注目する。十戒自体に先立ち、序文では人間が従う四段階の法(本性の法、欲求の法、モーセの律法、キリストの福音)とそれらを意味あるものとする「愛」が整理される。また第1・2講ではキリスト自身が命じる神と隣人への愛が解説される。ここには、法論における「愛」の強調が同著の特徴として指摘できる。(cf. J. Budziszewski, *Commentary on Thomas Aquinas's Treatises on Law*, Cambridge UP, 2014; Bradley, J. M. Dennis, *Aquinas on the Twofold Human Good: Reason and Human Happiness in Aquina's Moral Science*, CUA Press, 1999)。

## 〈学術的意義〉

トマスは『講話』において、十戒と「愛」の観念との論理的なつながりをほとんど説明しない。しかし主著『神学大全』を見てみると、キリストの二つの掟と十戒は、倫理的な諸規定の根本とされていることが分かる。すなわち、①実践理性の第一原理として「善」が受容され、ここから②「善は為されるべき、求められるべきであり、悪は避けられるべき」という自然法の第一規定が導出される(第1-2部第94問第2項)。さらに、③自然法の一環である倫理的規定のうち第一がキリストの掟であり(同第100問第11項)、これを原理として④十戒が派生してくる(同第3項; cf. Bradley, *op. cit.*, pp. 319-322)。『講話』で十戒自体に先立ち基礎としてのキリストの掟とその原理としての「愛」が語られていたことには、こうした背景が見出される。ところで、「隣人を自分自身のように愛する」ことを命じるキリストの掟は、すでに「自分自身を愛する」ことを前提している。しかし上述の通り、キリストの掟を基礎づける①②に「自己を愛する」ことは明示的には含まれない。それゆえ、一見して非人称的な①②の規定が、何らかのかたちで直接的に、すなわち愛されることや、愛の見返りを前提せず自己を愛することになっているのでなければならない。本発表では、以上を、「善」の観念を通して「愛」を再整理しつつ、諸規定の根本に「理性」が据えられているという点を通して証明する。これによって、トマスにおける法が「愛」を通して自己の善、自己の幸福にどのように寄与するかを明らかにするとともに、『十戒講話』という著作がこうした思想を簡潔に表明していることを指摘する。

## 女性の尊厳と自由意志—ペラギウス派による構造悪・原罪論批判の一要点

南山大学総合政策学部 山田 望 (Nozomu Yamada)

## 〈研究目的〉

ペラギウス派文書の特徴として、当時の教会の道徳的腐敗・墮落に対する厳しい批判・改革の意図と、その構造悪を結果的に支持したアウグスティヌスの原罪論や義認論に対する批判、また彼らによる人間本性や自由意志の弁護が挙げられる。しかし本稿では、これらの特徴が、特に女性への教育的配慮として主張されており、女性の尊厳と自由意志の喚起とが彼らの主眼の一つであったことを、そのための修辭的技法も含めて明らかにしたい。

## 〈学術的背景〉

この 20 年間にペラギウス派研究は格段に進歩した。彼らの神学は、初代教会以来の自発的信仰者集団としての特徴を有し、東方神学の基本的枠組み、中でもアンティオケイア伝承の特徴が顕著であることが明らかとなった。他方、ペラギウス派内部の多様性が解明され、ペラギウス本人の神学は一層、ペラギウス主義とは異なることが明らかとなった。E. Pagels, P. Gorday らはペラギウス派による女性観を評価し、方や G. Bonner や P. Burnell らは保守的なペラギウス派批判に終始する。しかし、M. Lamberigts や A. Dupont は、もはや異端的セクトではなく正統的キリスト教伝承の一系譜に彼らを位置づけようとする。本稿では、これらの先行研究を批判的に踏まえながらも、とりわけペラギウス派文書に展開される女性信徒への牧会的言説にどのような特徴、技法が伺えるかについて、発表者自ら見出した新たな知見を紹介したい。

## 〈学術的意義〉

ペラギウス派研究の進展に伴い、ペラギウス派内部に相当な多様性のあることが明らかとなった。その中でもペラギウス自身は、禁欲主義や功績主義などではなく、禁欲的訓練や恩恵への自発的応答を強調する東方型の神人協働説を説いていた。

ところで、古代のどの異端諸派や教会教父と比べても、ペラギウス派は、キリストにおける男女の平等や女性の尊厳を強調した点で特に際立っていた。Exemplum Christi や自由意志の強調といったペラギウス派の中心概念は、まさに女性信徒への牧会的配慮という文脈で語られていた。アスケーシスへの言及においても、ヒエロニムスのそれが極めて厳しい断食や節制を要求したのに対し、ペラギウス派はむしろエヴァグリオスの *Metriopatheia* に見られる「中庸」を旨とする、より穏やかな身体的・霊的自己管理を女性信徒に奨励した。その上で、ペラギウスは、パウロ書簡注解において、同一人称での逐語注釈という手法を用いている。即ち、ペラギウスの聖書注解を読む女性読者は、パウロ書簡の「私」にパウロ自身の語りと注釈者であるペラギウスの「私」、そして読者である女性信徒自らの「私」を三重に重ね合わせて読むことで、当時の問題状況における自身の生き方を自ら選び取るよう喚起された。ペラギウス派は、教会内部に入り込んできた世俗的構造悪の直中で、とりわけ女性信徒の自由意志、自発的決断を促そうと試みていたのである。



## ルター『九月聖書』の書誌学的考察—第 1 刷の本文をめぐって

広島大学 辻 学 (Tsuji Manabu)

## 〈研究目的〉

マルティン・ルターのドイツ語訳聖書初版『九月聖書』(Septembertestament) は、ドイツの複数の所蔵図書館が PDF 版をインターネット経由で公開している他、広島経済大学図書館も現物を所蔵しているが、本文に微妙な異同が存在する。そこで本研究では、その相違を比較検討し、『九月聖書』の第 1 刷 (に一番近い) 本文はどの版に見られるかを明らかにする。

## 〈学術的背景〉

いわゆる『九月聖書』は、ヴァイマル版ルター全集に収められているが (WA. DB 6)、そこに記された本文は、ルターが最初に翻訳したそのままのものではない。『九月聖書』はルター訳の「初版」であるが、ドイツの図書館が所蔵し PDF でネット公開している幾つかの本文を比較すると、細かい点で異同が見られる。発表者は、広島経済大学図書館が所蔵する『九月聖書』(これを第 2 版=『十二月聖書』と誤解しているルター研究者も存在するが) を調査した際に、この異同に気がついた。異同の存在自体は、ヴァイマル版ルター全集にも既に指摘があるが (WA. DB 6, S. XLII)、公開されている PDF 版 (および広島経済大学所蔵版) との間でその詳細を比較検討した研究は見られないようなので、入手できる限りの『九月聖書』を比較した上で、今回この報告を行うことにした。

## 〈学術的意義〉

『九月聖書』の存在自体は広く知られているとはいえ、その本文に、印刷過程で生じた異同があることまでは、ルター研究者の間でもあまり注目されないようである。『九月聖書』には、巻末にルター自身が作成した正誤表がついているが、この正誤表は僅か 8 箇所のみを挙げるのみの極めて不完全なものであるばかりか、正誤表に記載されていない誤りの訂正や本文の改変が、『九月聖書』の印刷過程で行われていたと見られる。本研究は、この問題を整理して、『九月聖書』の第 1 刷 (に一番近い) 本文を確定すると共に、インターネットで公開されている『九月聖書』のどの版を「オリジナル」として参照すべきかを明らかにしようと試みる。ネットで閲覧できる『九月聖書』には、ヴィッテンベルク以外の場所で印刷されたと思われる「海賊版」も (オリジナルと称した上で!) 存在するゆえ、『九月聖書』の最古の本文をどの版が示しているかを書誌学的に確定しておくことは、ルター思想研究に大きな影響を直ちに及ぼすものではないにせよ、歴史学的なルター研究の基礎として意義があると考えられる。また上述したように、『九月聖書』と『十二月聖書』の相違に関しても、一部の間に不正確な認識が見られるので、この点についても事実を整理して提示しておくことは、日本のルター研究に資するところがあると考えられる。

## 回心研究史の一考察—神学領域における独自性を求めて

関西学院大学 高木 政臣 (takagi masaomi)

### 〈研究目的〉

回心研究は、約 100 年の歩みにおいて、宗教心理学 (W. ジェイムズ『宗教的経験の諸相』) や宗教社会学に至る学際的テーマとなり、各領域でその視点が確立されてきた。しかし、神学領域においては、独自の視点が確立されてきたとは言い難い。そこで本稿では、神学的回心研究史を概観した上で、質的研究手法において回心研究を展開する『キリスト者の証言』との対話を通じ、その特徴を見出すことに努める。

### 〈学術的背景〉

神学領域における主な先行研究として、新約学では W.バークレーの『神への転換：使徒行伝と今日の回心について』(大隅啓三訳 ヨルダン社 1975 年)、歴史神学では野村耕三の『福音の歴史化と回心の神学』(新教出版社 1988 年)、組織神学では B・ロナーガン (Bernard J.F. Lonergan) の *Method in theology* (Darton, Longman and Todd, 1972)、宗教哲学では八木誠一の『回心：イエスが見つけた泉へ』(ぶねうま舎 2016 年) を挙げることができる。そして実践神学では、原敬子の『キリスト者の証言：人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』(教文館 2017 年) が挙げられる。

しかし、これら諸研究を通じて、神学的回心研究の特徴が、近年の宗教心理学 (EX 松島公望「プロテスタント・キリスト教に関わる日本人の宗教性発達に関する心理学的研究」博士論文 2007 年) や宗教社会学 (EX 伊藤雅之「入信の社会学」『社会学評論』1997 年) との相対的な関係性において、十分に確立されてきたとは決して言えない。

### 〈学術的意義〉

そこで発表者は、上記の研究目的と学術的背景を念頭に置きながら、研究を進めるに当たって、ひとつの問いを立てる。つまりそれは「近年、学際的テーマとして発展してきた回心研究において、神学領域におけるその独自性とは、いったいどのような側面に見出すことが出来るのか」というものである。この問いを実践神学の立場から明らかにするため、発表者は以下の手順で考察を展開していく。

最初に、学術的背景においても触れた諸研究、八木誠一の『回心：イエスが見つけた泉へ』(2016)、野村耕三の『福音の歴史化と回心の神学』(1988)、W.バークレーの『神への転換：使徒行伝と今日の回心について』(1975)、B・ロナーガン (Bernard J.F. Lonergan) の *Method in theology* (1972) を中心に、神学領域における回心研究史を概観する。

そして次に、回心を研究主題の 1 つとして取り扱った最新の博士論文『キリスト者の証言：人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』との対話を試みる。原の研究は質的研究手法を用いて日本に住むカトリック宣教師の回心模様を明らかにした点で、また、教会の現場と神学理論を繋ぐ点で、画期的な研究であると言えるだろう。発表者考えるに、ここで原が用いた方法論にこそ、神学とりわけ実践神学における回心研究の独自性を見出す手掛りがある。したがって、原の研究との対話を通じ、神学的回心研究が持つその独自性を見出すことに尽力する。

## ルドルフ・オットーにおける神秘主義

東京外国語大学 藁科 智恵 (WARASHINA Chie)

### 〈研究目的〉

ドイツの神学者・宗教学者ルドルフ・オットーは、その主著『聖なるもの』(1917)において、さまざまな「神秘主義」的な体験の叙述を行なっている。しかし、彼の初期の著作『ルターにおける聖霊の直観』(1898)における彼の「神秘主義」理解は、『聖なるもの』におけるそれとは相違が見られる。両者を対比し、両者がどのような関係にあるのかを解明したい。

### 〈学術的背景〉

20 世紀初頭ドイツの神学における神秘主義をめぐる議論に関する研究は、以下のマースによるものが挙げられる。ここでもオットーにおける神秘主義について取り上げられているが、本報告では、以下の二つの著作を通じて、オットーにおける神秘主義概念の独自性への理解を深める。Maaß, Fritz-Dieter. *Mystik im Gespräch : Materialien zur Mystik-Diskussion in der katholischen und evangelischen Theologie Deutschlands nach dem Ersten Weltkrieg.* (Echter, 1972); Otto, Rudolf. *Die Anschauung vom heiligen Geiste bei Luther: eine historisch-dogmatische Untersuchung.* (Vandenhoeck und Ruprecht, 1898); Otto, Rudolf. *Das Heilige: Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen* (München: C.H.Beck, 2004(1917))

### 〈学術的意義〉

オットーの初期の著作『ルターにおける聖霊の直観』における「神秘主義」理解は、19 世紀に台頭したリッチェル学派の影響を強く受けていたとオットー自身が述べている。『聖なるもの』においてはその影響を相対化した上で、神秘主義について論じている。このことから、オットーの二つの著作における神秘主義理解を対比させるという本報告を通じて、当時のプロテスタント神学においてどのような「神秘主義」理解が優勢であったのかを浮き彫りするとともに、そこからオットーはどのように議論を展開させ、自らの神秘主義理解を得るに至ったかを明らかにする。

## G.エーベリンクにおける《言葉の出来事》—現代神学における「信仰」の語り

東京神学大学大学院（博士後期課程） 朴 大信（PARK Daeshin）

## 〈研究目的〉

本研究では、G.エーベリンクの神学における中心概念である《言葉の出来事 Wortgeschehen》を考察する。ここでは彼の神学的方法を「解釈学的神学」として位置づけ、その方法に基づく思想の形成過程をみることで、彼の主要関心が《言葉の出来事》にあることを確認し、その内容と意義を深めたい。このことは単に神学的関心のみならず、今日の「信仰」のあり方と語りの地平を新しく捉え直してゆく契機ともなるだろう。

## 〈学術的背景〉

かつてバルトは、ロマン主義や経験主義的な神学を批判し、「宗教は不信仰」と断じた。他方ブルトマンは、史的イエスの再構築は信仰の外的保証を求めることだとして、イエスの実存的理解や「非神話化」の優位性を説いた。共に近代自由主義神学の超克を目指し、その足場として前者は「弁証法神学」、後者は「実存論的解釈」に立った。ところでエーベリンクは言う。「バルトは決して、その当初からの解釈学的関心を放棄しなかったし……彼の『教会教義学』は、解釈学的問題に対する暗黙の答えだった。他方、ブルトマンの解釈学的主題についての継続的な関心も、むしろそれは神の言葉の神学の方法論的な擁護以外の何ものでもなかった」。エーベリンクにおいて、「神の言葉」と「解釈学」は対立するものではない。ブルトマン神学の課題を担いつつ、「新しい解釈学」を切り開いた彼の神学的・信仰的営為を、主に自著『キリスト教信仰の本質』と『言葉と信仰』から辿る。

## 〈学術的意義〉

G.エーベリンク(Gerhard Ebeling,1912-2001)は今日、特に日本ではほとんどその名が知られていない。そのため彼の神学体系は全体としてあまり理解されておらず、例えば言語論的解釈学や実存論的人間学等の立場からの考察に眼目が置かれる傾向がみられる。本研究は、エーベリンクの神学思想における形成と展開が、「解釈学的神学」の方法に基づくことを確認しつつ、彼の思想が、神の《言葉の出来事》の生きた現実に即応する理解体系であることを捉えようとするものである。それは一方で、ブルトマンの実存論的解釈、また形而上学的神学との神学的格闘から生み出された、信仰の解釈をめぐる新たな地平を示すものである。だが他方で、その彼の神学が、単に言語論的な解釈学、あるいは実存論的人間学の文脈でのみ理解されるならば、エーベリンクの神学の真髄を見誤ることになるだろう。彼は方法としての「解釈学的神学」において、神の生きた言葉の出来事の現実に呼応する理解として《言葉の出来事》を展開したのであり、またそこに立ち現れることになる「信仰」の本質世界を開示するのであった。はたして彼の神学が、また発表者の理解が、それをいかに正しく表現し得ているかは議論を待つべきであろう。しかしこれからも新しく示唆を与えるものとして、特に現代の「不信仰」の時代、宗教改革 501 年目を迎える今年、「言葉と信仰」への光を灯し続けてくれるだろう。

## ラインホルド・ニーバーの恩寵論—アイロニーに関与する人間に対する回答としての恩寵論

滝野川教会 堺 正貴 (SAKAI MASATAKA)

### 〈研究目的〉

ラインホルド・ニーバーが、自身の「アイロニー」概念を明確に確立したのは、“The Irony of American History” (1952) においてであった。この概念から見直すと、すでにニーバーの人間論（とりわけ自由と罪の問題）は、このアイロニーとして把握されていたことが分かる。本研究は、ニーバーの恩寵論が、アイロニーに関与する人間への回答として、鮮明な構造を持っていることを明らかにする。

### 〈学術的背景〉

ニーバーの恩寵論は様々に論じられているが、アイロニーとして理解された人間への回答として、彼の恩寵論を一貫して再把握しようとする試みはない。論者は『聖学院大学総合研究所紀要』64号に掲載される論文において、人間や世界について悲観主義的と見なされたニーバーのギフォード・レクチャーの罪論そのものにおいて、すでにアイロニーという構造が出ていることを明確にした。アイロニーは、人間の生に不可避的に纏わりつく罪を、元来の自由の創造性への肯定を背景にして、その責任を曖昧にせず把握しようとする、愛ある批判原理といえる。アイロニカルな見方は、それ自体の内に、悲哀と悲劇では捉えられない人間の生への肯定が含蓄されており、悲観主義的ではない。しかし、上記論文では、アイロニーを軸に彼の恩寵論を展開することはテーマではなかった。本論は、それを行うことで、ニーバーの人間観が恩寵論においても一貫していることを明らかにする。

### 〈学術的意義〉

ニーバーにおけるアイロニー概念を軸に、人間論との関連において、彼の十字架論、贖罪論、義認と聖化の恩寵、そして両者の関係の在り方を示す恩寵のパラドックス、こうしたすべてのものの構造、その内容の同一性を、簡潔に見通すことができるようになる。

アイロニー的生とその生のあり方の把握を救済へと昇華する十字架の福音、贖罪、恩寵のパラドックスは、すべて彼の理解した自由と罪という人間存在に焦点を絞ってぶれていないことが明白となる。ニーバーにとって、歴史世界は神の自由と人間の自由の働く領域である。恩寵は信者、非信者を区別しない。殉教したキリスト者が、一般恩寵に支えられた世俗主義者に、愛において劣ることのある可能性をニーバーは示唆している。人間の生において恩寵のパラドックスの働きとは、人が自己の矛盾を凝視できることがより良き実りを生む可能性をもたらし、矛盾から目を閉ざすことが矛盾を広げるといふ所にある。義認を聖化への一段階として捨象すれば、信仰者は、後者のパラドックスに絡み取られ、また歴史の諸力によって、「聖化」を「義認」に常に従属させる仕方で、前者の達成に向かう非信仰者もいる。こうした考えは、ニーバーの神学を自然神学とする批判を生みはしたが、長期間、キリスト教徒が少数に留まる日本において、信徒が悲痛な傲慢と隠微な憎みに捕らわれず、キリスト教の救済を同じ共同体の仲間に伝道する力になると論者は考える。

## 牧会における対話の構造—日本の文脈における考察

関西学院大学大学院神学研究科／日本基督教団三木教会 家山 華子 (IEYAMA HANAKO)

### 〈研究目的〉

本研究は、牧会的対話の構造について、日本の文脈において考えることを目的とする。まず、キリスト教の牧会において、これまで対話がどのように位置づけられてきたのかを概観する。そして、日本人における対話の特徴について、特に臨床心理学における日本の文化に即した方法論から考察を行う。その上で、欧米の対話理解とは異なる理解をもつ、日本の文脈における牧会的対話の構造について考察を行うこととする。

### 〈学術的背景〉

教会が誕生して以降、牧会者は対話を用いた魂の配慮を行って来た。学問として「牧会学」が体系化されると、「説教」が共同体に対して行われるのに対し、「牧会」は、個人との対話として行われることが強調されるようになる。特に、神の言葉の神学に基づいた牧会は、対話という形態によって、神の言が個人に伝達されることを目的とした（トゥルンアイゼン著『牧会学』）。一方、アメリカで発展した牧会カウンセリングも、対話を主な手段として用いる。しかし、これらの欧米を中心に発展した理論が日本に紹介された時、日本的なコミュニケーションや言葉に対する意識と、馴染まない面があったのではないだろうか。欧米とは異なる日本人の対話の特徴については、臨床心理学領域においても注目されている（三木・黒木『日本の心理療法：その特質と実際』）。それらを基に、日本の文脈における牧会的対話の構造について考察を行う。

### 〈学術的意義〉

日本の牧会学は、第二次世界大戦以降、欧米から紹介された牧会学及び牧会カウンセリングから学び、また実践が展開されてきた。しかし、日本の牧会の現場でそれを実践しようとする時に、日本人の言葉の感覚やコミュニケーションの特徴に馴染まないという感覚を覚えることがある。この感覚は、牧会学と牧会カウンセリングに共通して言えるだろう。しかし、1960年代以降、日本の牧会学は、神の言葉の神学を中心にした牧会学とカウンセリングを用いた牧会の二極化が進み、日本の牧会現場における共通した素朴な感覚を置き去りにしてきたのではないだろうか。本研究は、この欧米発の牧会理論の馴染まない感覚に正面から取り組む試みである。

しかし、欧米において蓄積されてきた、「牧会とは何か」という問いを無視して、日本独自の牧会理論を生み出すことはできない。これらの研究の蓄積を継承しつつ、しかし、欧米的な対話理解が前提として進められてきたこれまでの牧会学の議論に、異なる対話の特徴をもった文化からの問いを投げかけることは意義のあることではないだろうか。その意味で、本研究は、これまでの牧会学の議論を、日本の実践の現場から考えるものである。これによって、欧米の牧会理論を通して実践を理解するだけでなく、日本の牧会実践の現場において日々生じている出来事の意義に注目し、現場から発せられる日本独自の牧会の議論が活発になることが期待される。

## 恥についての牧会神学的考察

上智大学グリーンケア研究所 中井 珠恵 (Tamae Nakai)

### 〈研究目的〉

本論は、D. ボンヘッファーと北森嘉蔵の恥についての神学的考察を手がかりとして、自らを恥じて苦しむ人への牧会ケアについて検討する。論者は、恥じる人へのケアとは、イエス・キリストの十字架によって神の愛を知ること、自らを受容することであると考える。

### 〈学術的背景〉

牧会神学において、恥は、心理学的に考察されてきた。大柴譲治は、E. エリクソンの発達課題を引用し、罪が行為の次元の痛みや悔いであるのに対し、恥は存在の次元における痛みや悔いであると論じる (大柴 2015)。J. サックは、人間が初めて恥ずかしさを経験するのが、家族であることから、その人の恥に関わる家族の歴史・価値観・感覚を知ること、その人が心を開けるように支持する必要があると、家族療法の視点から論じる (Sack 2005)。R. アルバースは、恥を自分を無価値に思うことであるとする。そのケアは、その人が、無価値な自分を受容することであり、その受容は、十字架の上で見捨てられ、軽蔑されたイエス・キリストが、自分の恥の苦しみを理解してくれると感じ、孤独から解放されることであると論じる (Albers 1996)。

### 〈学術的意義〉

本論は、このような研究史を踏まえ、心理学的考察を脇に置き、神学的考察に重点を置く。なぜなら神学的考察が十分でない、恥じる人の自己開示や自己受容が、人間的営みに留まるからである。

最初にボンヘッファーを取り上げる。彼は、恥を、人間が、善悪の知識を得て神から離れたことを、いかんともしがたく思い、根源に戻りたいと無力に願うことであると考察する。そして人間は、自ら善悪の規範となって互いを裁き、さらなる分裂をまねく。この分裂状況を越えた神との和解を説いたのが、イエス・キリストである。

本論は、この恥理解を踏襲しつつ、恥に苦しむ人に、神がどのように現れるかについて検討するために、北森神学を取り上げる。北森は、神が、分裂した人間を怒りつつも、愛すと理解する。その愛は痛みとなる。ところが人間は、神の痛みを「なぜ神は、こんなむごいことをなさるのか」という痛みとして経験する。しかし人間は、その痛みを受けるしかない恥ずべき状況で (ヘブ 13: 13)、背いた自分を腸がちぎれるほど愛憎し、果てには自分のために愛する独り子を手放された神の痛みと知る。

論者は、死の臨床で、神の痛みは、リアリティを持つと考える。死にゆく患者は、人間的規範では無意味となった自分を、汚れなどいわず手当てる姿を見る。また自分だけが無力に死んでいくと感じて作った他者との断絶を超えて、寄り添おうとする姿を見る。これらの痛ましくもある姿は、イエス・キリストの似姿となる。その姿を通して、死を目前にした患者は、寄り添なさを感じて生きてきた自分が、根源的に受け入れられるのを知るのである。

## 「アジアの女性たちの神学」運動におけるエコフェミニスト神学の萌芽—In God's Image 誌の事例から

東北学院大学 藤原 佐和子 (Sawako Fujiwara)

### 〈研究目的〉

本研究の目的は、1987年設立のAWRC (Asian Women's Resource Centre for Culture and Theology) が刊行するIn God's Image 誌 (以下IGI) を主な資料として、エキュメニカルな特徴を持つ「アジアの女性たちの神学」運動において、エコフェミニスト的視点がどのように萌芽してきたかを調査・検討することにある。

### 〈学術的背景〉

エキュメニカル運動の視点から「エコ神学」(eco-theology) を捉え直してみると、1970年代から早くもエコロジカルな諸課題に取り組んできた世界教会協議会 (World Council of Churches) が、グローバルなレベルでのネットワークと「地域的な」(regional) 取り組みの連携を今日の課題としていることが分かる。そこで地域エキュメニカル協議体 (regional ecumenical organizations, REO) に視点を移してみると、初のREOであるアジア・キリスト教協議会 (Christian Conference of Asia, CCA) の事例では、1992年の「地球サミット」以降、環境の問題に取り組んできたことが分かる (拙稿『『キリスト者であること』と『エコであること』『福音と世界』2016年1月号 (特集: 聖書とエコロジー)、6-13頁)。

### 〈学術的意義〉

1990年代以降、リューサー、マクフェイグらによって牽引された「エコフェミニスト神学」(ecofeminist theology) の分野では、今日、非西洋地域 (non-western regions) におけるエコフェミニスト神学の展開に期待が寄せられており (Heather Eaton, *Introducing Ecofeminist Theologies*, T&T Clark International, 2005)、その先駆的事例と見なされているのは「解放の神学」をルーツとするラテンアメリカにおけるエコフェミニスト神学である (拙稿「ラテンアメリカのエコフェミニスト神学とイヴォネ・ゲバラ」『基督教研究』80巻1号、39-58頁)。これに対して、アジアのエコフェミニスト神学と呼ぶべきものの実態が明らかでないのは、端的に言って、こうした動きにアジアの女性キリスト者たちがどのように応答してきたかについての研究が行われてこなかったためである。したがって、本研究が「アジアの女性たちの神学」(または、「アジアにおけるフェミニスト神学」と呼ばれる運動の代表的プラットフォームとなってきたIGIのバックナンバーから「環境」「エコロジー」「エコフェミニスト」等に言及する論攷を収集し、彼女たちの間におけるエコフェミニスト的視pointsの萌芽を調査・検討することは、アジア/日本のエコフェミニスト神学の展開に対する学問的貢献を試みるものであるだけでなく、1993年の『エコロジーとキリスト教』(富坂キリスト教センター、新教出版社) に始まる日本の神学研究におけるエコロジカルな諸課題への取り組みの継承を目指すものでもある。



## ロバート・ゴスにおけるクィア神学とその評価について

同志社大学（嘱託講師） 朝香 知己（Tomoki Asaka）

### 〈研究目的〉

本発表は現代アメリカ合衆国の牧師であり神学者であるロバート・ゴスによる著作『ジーザス・アクティッド・アップ—ゲイとレズビアンのマニフェスト』に焦点を当て、そこでゴスが構想する「クィア神学」の内容と、それに対して与えられてきた様々な評価を検討するものである。

### 〈学術的背景〉

同性愛という主題は、とりわけ 1970 年代以降、世俗的な解放運動の社会における拡大に伴い、キリスト教においても様々に議論されてきた。その中から 1990 年前後に、それまでとは幾分性格の異なる「クィア」という概念が登場したのを受け、キリスト教においても「クィア神学」が出現している。ゴスの『ジーザス・アクティッド・アップ』（Robert Goss, *Jesus ACTED UP: A Gay and Lesbian Manifesto*, San Francisco: HarperSanFrancisco, 1993）はその最初期の著作であり、出版から 20 年余りを経た 2014 年のアメリカ宗教学会（AAR）年次大会においてもこの著作を主題にパネルが行われ、そこでの議論が『神学とセクシュアリティ』誌（*Theology & Sexuality*, vol. 21 no.3, 2015）に特集されるなど、その重要性が今なお評価されている。

### 〈学術的意義〉

このように、ゴスの『ジーザス・アクティッド・アップ』は、現代のキリスト教において無視することのできない課題の一つである、人間の「性」をめぐる問題を考察する上で、今なお有益な示唆を与え続けている著作であると言えるだろう。その一方で、ゴスが同書で自身の展開する議論を「クィア神学」と称しているにもかかわらず、この著作に対する評価として、それを「クィア神学ではない」と位置付けているものも散見される。

本発表は、このようなゴスの著作をめぐる錯綜した評価を整理することによって、レズビアンやゲイを肯定する神学議論（いわゆるレズビアン／ゲイの解放の神学と呼ばれるもの）とクィア神学という二つの潮流のそれぞれの焦点や問題点を明らかにすることによって、いまだクィア神学はもちろん、その登場の背景たるレズビアン／ゲイ神学さえも十分に展開されてきたとは言えない日本のキリスト教（神学）の現状において、今後どのように「性」の問題を議論（神学）していくことができるのか、その方向性を見出すことに寄与し得るものとする。

# 2 日 目

2 日 目 第一会場 午前 1

## 吉野作造の人格観と政治・社会思想

九州工業大学教養教育院 本田 逸夫 (HOMDA Itsuo)

### 〈研究目的〉

吉野作造の思想においては、そのデモクラシー論が示す通り、万人に「神の子」としての「神聖」・尊厳を認める「基督教的人格主義」が重要な位置を占めていた。しかし、その人格観の特質や、政治思想との関連についての検討は従来、不十分であった。本発表ではその問題を、国家観など、いくつかのテーマにそくして、かつ海老名弾正との比較も交えて、考察する。

### 〈学術的背景〉

吉野作造に関しては、政治史、政治思想史などの分野で活発な研究が行われてきた。しかし彼のキリスト教信仰、特にその人格観について探求した試みは、武田清子、宮田光雄などの業績における簡単な論及に限られている。さらに、吉野とその信仰上の師、海老名弾正の思想上の異同という問題も、興味深いものながら従来、研究は乏しかった。筆者は、海老名の信仰観、国家観等について考察してきた自らの成果をも用いて、二人の比較を試みる。そのことにより、吉野の人格観の特質と意義がいつそう明瞭になると考えるものである。

参考文献： 武田清子『戦後デモクラシーの源流』、飯田泰三『批判精神の航跡』、松本三之介『吉野作造』、宮田光雄『国家と宗教』、本田逸夫「明治末年以降のローマ書一三章論」(九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 5 巻 1 号)、同「海老名弾正のローマ書一三章論」『政治研究』64 巻 6 号)。

### 〈学術的意義〉

特質と役割に対する研究が従来、不十分だった理由の一つは、吉野の政治論が信仰との関連を前面に出さないものだったことにある。それに加えて、そのテーマがいわば人文科学と社会科学の境界領域に属するために(近代日本で早熟的に進行した)専門分化に災いされて検討が及びにくかった、との事情も存するだろう。そうだとすれば、それは、ローマ書 13 章(1-7 節)の解釈史の研究が不十分だったとの事実とも共通する、日本のキリスト教研究史に係わる問題点だと言えよう。本発表は、その克服の一助となることを望んでいる。

また、吉野の思想、特に大正期に展開されるリベラル・デモクラシーの唱道は、グローバル化や、市場原理主義的な自由主義・排外主義・国家主義との対抗等という文脈上の現代との共通性を含めて、改めて考察されるに値する内容を含んでいる。思想的寛容、多元主義、他民族との共存、権力の自制の要求、などの吉野の主張と、人格観の関係が立入って探求されるべき所以である。その関連で、親密な師弟関係にありつつも、国家観、朝鮮論、国家神道論、等において明確な対照・分岐を示した、吉野と海老名の思想の比較検討は、重要な意義をもつであろう。

## 敗戦後の日本キリスト教婦人矯風会と大韓基督教女子節制会—キリスト教宣教理念の比較

名古屋学院大学 神山 美奈子 (KAMIYAMA Minako)

### 〈研究目的〉

朝鮮半島が日本の植民地支配下にあった1939年に合併した日本キリスト教婦人矯風会と朝鮮基督教女子節制会は、日本の敗戦に伴い合併を解消し、その後の両団体にはキリスト教宣教理念に差異が生じた。なぜ日本の敗戦を契機に宣教理念に差異が生じたのかを明らかにし、日韓女性キリスト者間の今後の課題と展望を示すことを目的とする。

### 〈学術的背景〉

日本キリスト教婦人矯風会(以下、矯風会)に関する研究は、廃娼運動、婦人参政権問題、平和問題、あるいは人物研究といった側面から行われ、『日本キリスト教婦人矯風会百年史』(日本キリスト教婦人矯風会編、ドメス出版、1986年)をはじめ矯風会に関する多数の著書や論文がある。しかし、矯風会と日本の植民地支配下にあった朝鮮基督教女子節制会(解放後は大韓基督教女子節制会。以下、大韓節制会)の合併や解消に関する研究(拙論「日本キリスト教婦人矯風会と朝鮮基督教女子節制会の合併に関する一考察」、『アジア・キリスト教・多元性』、第16号、2018年3月)をはじめ、日本の敗戦を契機とした両団体の合併解消以降にどのような交流があり、なぜキリスト教宣教理念に差異が生じたのかに関する考察はこれまで見当たらず、本研究発表で明らかにされる。

### 〈学術的意義〉

先行研究は、敗戦以前における矯風会が朝鮮をどのように理解していたかについて論じるにとどまっており、矯風会と大韓節制会の関係を詳細に考察、比較するものは見当たらない。矯風会は朝鮮が日本の植民地下にあった1921年に朝鮮部会(日本女性を対象)を発足させ、1939年に独自の活動を維持していた朝鮮基督教女子節制会と合併するが、敗戦に伴いその関係は解消され、朝鮮部会も解散する。この詳細については先述した拙論で考察したが、両団体の母体は世界基督教女子節制会(World Woman's Christian Temperance Union、以下 WWCTU)であり、敗戦後も両団体の交流は WWCTU の大会の場で続けられていた。しかし、その後、矯風会は WWCTU とキリスト教思想及び宣教理念において乖離が生じたことにより距離を置くこととなった。一方、大韓節制会は矯風会との関係解消後も WWCTU と密接な関係を保っている。敗戦後の矯風会は WWCTU から距離を置くことで独自のキリスト教宣教理念を展開させ、日韓交流においても大韓節制会とではなく独自の関係を築いてきた。その背景には日韓両国のキリスト教界における宣教理念が影響を与えており、両団体は両国キリスト教界の縮図を示しているのではないかと考えられる。本研究発表において両女性キリスト教団体の敗戦後の宣教理念を示し比較分析することで、日韓キリスト教界間に生じる差異を見出し、今後の相互理解の道を探る。

## 海老名弾正の弟子たちの神道理解—吉野作造、柏木義円、石川三四郎、中島重を中心に

明治学院大学キリスト教研究所 洪 伊杓 (HONG Yipyo)

### 〈研究目的〉

神道に対する独自の理解を示した海老名弾正は、吉野作造、柏木義円、石川三四郎、中島重などの弟子たちと社会思想において異なる立場を見せた。その思想的相違点の背後には、この弟子たちの神道理解が海老名と対立した部分があるのではないかという疑問を明らかにすることを目的とする。

### 〈学術的背景〉

キリスト者としての海老名弾正が日本の代表的な伝統宗教である神道をどのように理解したのかについては、金文吉（『近代日本キリスト教と朝鮮：海老名弾正の思想と行動』明石書店、1998年）によって基本的な研究が行われた。しかし金の研究は海老名の神道理解を明らかにするためのより立体的で多角度的な研究にまでは至っておらず、限界がある。その後、筆者が松山高吉、高橋五郎など同時代に海老名と交流し、神道に関して研究した代表的キリスト者との神道理解の比較研究を行い、海老名の神道理解の特質と性格をより鮮明に分析することができた。これは明治キリスト者の神道理解の類型を論ずることによって海老名の神道理解の位置を明確に把握することであったが、海老名のそのような神道理解が次世代にどのような影響を与えたのかについては課題として残されていた。

### 〈学術的意義〉

海老名から多大な影響を受けた弟子たちが、大正期から海老名とは異なる社会思想を展開した。このような師弟間の社会思想における決別の中に神道理解の相違点が影響を与えたのではないか、ということを実明することは、現在まで分析されたことのないテーマであり、新たな学術的な試みになるだろう。吉野作造や柏木義円は海老名が積極的に受け入れた「内地＝日本」という概念に批判的な立場を表し、日本帝国を世界の中心として設定した海老名の国家意識と距離を置いた。そして、海老名が植民地民（外地の人々）を「土人」という蔑視的・差別的に表現した反面、吉野や石川三四郎は「土民」という概念で植民地民の平等性を強調した。デモクラシーに関しても、海老名は吉野と異なる見解を示した。そして地上での理想社会の構想を明らかにした「神の国」理解においても中島重と中島に大きな影響を与えた賀川豊彦と思想的な対立があった。このような「大正デモクラシー」世代の弟子たちは、なぜ海老名と社会思想において相違点を見せたのか。その背後には明治時代以来、近代日本を構築する時に大きな意味を持った神道に関する理解の相違が原因としてあるのではないか。それを究明するため海老名の弟子たち（吉野、柏木、石川、中島と賀川）の神道理解の特質を分析する。これは海老名の独特な神道理解を積極的に継承し、発展させた弟子である渡瀬常吉との比較のためにも有意義な研究になると考える。

## 黙従に見る敬虔と狂信—アブラハムのイサク献供（創 22:1-19）をめぐって

北星学園大学 山吉 智久（YAMAYOSHI, Tomohisa）

## 〈研究目的〉

本研究は、創世記 22 章 1-19 節に収録されている「アブラハムのイサク献供」の物語について、特定の立場や理解を前提にすることなく、原典のヘブライ語テキストそのものを文献学的に分析することによって、この物語を作り出し、旧約聖書の中に収めた人々の意図を探ると共に、これを現代のわれわれがどのように受け止め、そこから何を読み取るべきか見出すことを目的とする。

## 〈学術的背景〉

創世記 22 章の「アブラハムのイサク献供」は、読む人を強く惹きつけると同時に、理解することが非常に難しい箇所の一つである。古代から現代に至るまで、この物語は、聖書学者にとどまらず、哲学者や芸術家たちにも大きな影響を与えてきた（関根清三編著『アブラハムのイサク献供物語—アケダー・アンソロジー』日本基督教団出版局、2012 年など参照）。本物語は、きわめて簡潔な文章と表現によって構成されているがゆえに、これまでの諸研究には、登場人物の言外の心情を推し量ったり、哲学的な思弁によって説明を試みたりする傾向が少なからず認められる。このような背景の下、本研究が重視するのは、あくまでも学問的な実証性であり、物語の構成や個々の表現、それらの間テキスト性に重きを置く。

## 〈学術的意義〉

「アブラハムのイサク献供」の物語がとりわけ読む人の頭を悩ませるのは、アブラハムが神の言葉に忠実であることによって、わが子をささげることになる、というジレンマであろう。「人殺しを命じる神とは何者なのか」と、ただでさえ暴力的で評判の芳しくない旧約聖書に、このような話があること自体が、読む人にとっては大きな躓きとなることが少なくない。しかし、この物語そのものが言わんとしていることを、われわれが手するテキストの中に見出す努力は、あるものを自分・社会の常識に適合しないことを理由に拒否・拒絶するという行為とは一線を画する。暗黙の内に前提とされている（しかし決して完璧ではない）自分・社会の常識の内実について再検証を促すためにも、今一度、原点に立ち戻って、物語のヘブライ語テキスト、そしてこの物語が置かれている文脈を分析してみることは、決して益無きことではなからう。

## 『七十人訳聖書』レビ記 13:2-46 におけるツァラアトの訳語としてのレプラ—ギリシャ語ハフェーを転換点とする「脱医学化」の試み

関西学院大学大学院神学研究科 堀 忠 (Hori Tadashi)

### 〈研究目的〉

「レプラ」に関する記述として知られる『七十人訳聖書』レビ記 13:2-46 の記事が、古代の医学文献に用いられている医学用語の使用を周到に避けつつ、古代イスラエルの祭儀についての記憶を祭儀的な語彙を用いてギリシャ語に翻訳しようとしたものであり、したがってレプラに関しても、そこになんらかの近・現代的な意味での医学上の読み込みを行おうとすることは、避けられるべきであることを明らかにする。

### 〈学術的背景〉

レプラを巡る文献学的、考古学的、歴史社会的な諸研究は、ヘブライ語ツァラアトからギリシャ語レプラを経て近代のハンセン病に至る一連の言説史に関する、さまざまな伝説的誤謬を明らかにしてきた (C. Rawcliffe (2006), Z. Gussow(1989)ほか)。また『七十人訳聖書』についての最近の研究 (A. Pietersma and B. G. Wright (eds.) (2007)) は、翻訳に当たった訳者 (たち) にそれぞれ固有の困難や翻訳方針のあったことを示した。近年のデータベースの拡充は医学文献を含む広い範囲の古代ギリシャ語文献における用例・用法の検索を容易にした。一方、現代語聖書諸訳はいまだに皮膚病、患者、患部、症状 (『新共同訳』)、disease, diseased (NRSV) などの訳語を用いており、この部分の記述を現代的観念におけるなんらかの病気、病状に関連するものとする理解を維持している。

### 〈学術的意義〉

今日創世記が天文学や地質学の文献として理解・翻訳されることはありえない。レビ記、特に一旦長期にわたって現実に存在する特定の病気との関係で歴史的に重大な役割を果たした 13:2-46 についても、完全な「脱医学化」が求められている (荒井 (1996) ほか)。

『七十人訳聖書』レビ記は、「いかなるネガーがツァラアトのネガーであるか」という命題を「いかなるハフェーがレプラのハフェーであるか」と翻訳した。「五書」翻訳時期までのレプラの用法は、1) 皮膚についての医学用語、2) 古代・異国の祭儀的禁忌、3) 意味の明らかでない一般的形容詞、の三つの用法に判然と分けることが出来る。一方、一般的には「接触」を意味するハフェーには医学上皮膚、あるいは皮膚病変を意味する用例はきわめて少なく、医師たちも、またホメロスや悲劇作家たちも、重大な皮膚病変については常にヘルコスの語を用いている。レプラが医学用語と理解されていたならば、ネガーはハフェーではなく、ヘルコスと訳されたであろう。あえて医学用語を避けた訳者 (たち) がレプラの意味をどのように考えていたかは明瞭である。本研究では、訳者の置かれていた言語的環境を再現しつつ、訳者の意図、翻訳方針について考察する。レビ記当該部分が医学文献としてではなく祭儀的文献として訳出された経緯を明らかにすることは、解釈を近・現代の病気概念への拘束から自由にする意味で、必要なことであると考えられる。

## ルツ記 1章における文学的技巧

関西学院大学 岩寄 大悟 (IWASAKI Daigo)

### 〈研究目的〉

本発表は、ルツ記のテキストに見られる文学的技巧を明らかにする。ルツ記にはさまざまな文学的技巧が用いられ、他の聖書テキストとの関連性や語句の含意を示唆・使用することで、豊かな物語世界を構築している。本発表では、主にナラトロジー（物語論）と間テキスト性の理論を用いて、ルツ記1章の物語世界を作り上げている文学的技巧を明らかにすることを目的とする。

### 〈学術的背景〉

自覚的に文学理論を援用したルツ記1章を含む先駆的な先行研究として、次の諸研究が特に重要である。

A. Berlin, (1983) "Poetics in the Book of Ruth," in: Poetics and Interpretation of Biblical Narrative.

D. N. Fewell & D. Gunn, (1999). Comprehensive Redemption: Relating Characters in the Book of Ruth.

また、近年の雑誌論文として次のもの特に重要であり、ルツ記における物語での詩文の効果などを論じている。

Tod Linafelt, (2010) "Narrative and Poetic Art in the Book of Ruth," Int 64(2): 117-129.

### 〈学術的意義〉

ルツ記はこれまでその文学的特質が高く評価されてきたが、文学理論を自覚的に適用し、どのような箇所文学的技巧が用いられているかを論じたものは上述の先行研究などごく少数である。しかも、これらの諸研究では物語全体での登場人物の性格や語りの視点、さらにルツ記全体の文学的特長を明らかにしようとするあまり、細部での分析がおろそかになっている点は否めない。しかも、文学的技巧は物語の一部を分析する場合と物語全体で分析した場合は、その性格は異なるものとなる。その点で、本研究は物語の一部分（1章のみ）に限定し、その文学的技巧がどのような効果を有するのかを示す点で意義がある。

また、本発表ではこれまで集中して論じられることの少なかった固有名詞が暗示するものや固有名詞が含意する意味と物語における展開での固有名詞の役割の間で生じるアイロニー、語り手や登場人物が用いる他の登場人物への呼び方によって明かされる登場人物間の関係などを中心に検討を行う。

## マタイによる福音書 26 章 6-13 節—「香油を注ぐ」という行為の意味するもの

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 早藤 史恵 (Fumie Hayafuji)

### 〈研究目的〉

四福音書のイエスに女が香油を注ぐ物語のうち、マルコとマタイには、イエスの「良いことをしてくれた」(καλὸν ἔργον) ということばが記されており、両福音書は大変似ているといえる。一方、語彙や語順等には幾つか異なる点がある。本稿ではこれらマタイの改変に重要な意味があるのか、またマタイ 26 章において、イエスが καλὸν ἔργον と言うところの香油を注ぐ行為が、何を表しているのかについて考察する。

### 〈学術的背景〉

伝統的解釈では、マタイにおける語彙の改変にあまり意味を見出していない(例 U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2002)。一方、M. Konradt は、その改変に重要な意味を見出す(*Das Evangelium nach Matthäus*, 2015)。また、この物語における油注ぎの解釈は、概ね次の三つとなる。

- ① 葬りのため : Schlatter, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1961. 他
- ② メシア的王 : E. Schweizer, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1986. 他
- ③ 愛のわざ、献身 : U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2002. 他 Schweizer らを代表とする②の解釈に対して、U. Luz は批判的な見解を示している。

### 〈学術的意義〉

既に Schweizer は上掲書において、マタイにおける προσέρχουμαι (近寄る) は、人間が畏敬の念をもってイエスに歩み寄るさまを述べるために使用されることや、旧約聖書においては、祭祀的拝礼を表すために用いられていることに触れている。本稿では、マタイにおいて改変された語順 (ἔργον ... καλὸν) やことば (βαρύτιμος : 極めて高価な) 等を取り上げ、中でも προσέρχουμαι に着目し、その LXX における使用法、さらにはヘブライ語に遡った使用法を詳しく見ることを通して、Schweizer の見解をさらに深めることを目指す。以上の考察を通して、Konradt が述べるように、マタイ 26 章における改変には重要な意味があることを明らかにし、さらには、イエスが ἔργον ... καλὸν と述べた、女が香油を注ぐ行為は、従来の解釈に加え、「メシア的王に対する、真(まこと)の礼拝」という解釈が可能であることを明らかにする。



## ゴッホの《善きサマリア人》における両極の融合

正田 倫顕 (Tomoaki Shoda)

### 〈研究目的〉

ゴッホはキリスト教および教会に猛烈な嫌悪を示しながらも、イエスを終生重要な存在だと捉えていた。《善きサマリア人》(F633/JH1974)は、ゴッホにとってのイエス、イエスとの合一や一体化を考える上で、避けて通れない作品である。詳細に分析することで、イエスがいかなる存在として表現されているか考えてみたい。さらにはイエスをこえて表現されてしまったことにも目を向けたい。

### 〈学術的背景〉

ゴッホの《善きサマリア人》はドラクロワの模写作品である。とはいうものの、ゴッホはドラクロワの作品を実際には見ておらず、手元にあったのはジュール・ローランスによる複製リトグラフであった。模写作品であるせいか、展覧会や画集などの扱いも重要作品として中心をなすものとはなっていない。またこの絵を正面から論じようとする者も少ない。例えば、テオの献身に対する感謝を読み取ろうとする解釈などがあるが、そうした捉え方では絵の深層(真相)にまで迫れているとは言いがたい。ローランス、ドラクロワ、ゴッホによる三作品を詳細に比較・分析し、どのような特徴や独自性が現われているかを検討したい。そうすることで、ゴッホの芸術に新しい光を当てられるのではないかと考えている。

### 〈学術的意義〉

《善きサマリア人》において、合一というテーマは幾層にも重なっている。まず模写という行為自体に、ゴッホとドラクロワの合一がある。ゴッホはドラクロワの構図やモチーフに自分の色彩とタッチを混ぜ合わせ、作品を仕上げている。模写とはいっても、原作が主でゴッホの作品が従という関係にはとどまっていない。二項対立的な主従関係は崩れ、両者は溶け合い高次元な発展を遂げている。

そして絵の中では救助するサマリア人と瀕死のユダヤ人の一体化が認められ、二人は周囲の世界とも融合している。ここでは救う者と救われる者が本質を同じくしている。本来対極にある両者が画面中央で抱擁し、深い連続性の中で溶け合っている。

さらにこのたとえ話を語ったイエスの姿がサマリア人の中にもユダヤ人の中にも認められ、画面中央にはイエスの高貴な姿と惨めな姿が一体となって描き出されているとも解されるのである。

しかしこの絵の主題は「イエス」にだけ限定されるものではない。なによりも二元的な両極が通じ合っているというテーマが中心にある。ここに出現しているのは一元的な世界であり、対象と自我の境界は溶け合い両者は渾然一体となっている。ゴッホは何もかもが溶け合い、渦巻き、循環する世界を表わしてしまったのである。《善きサマリア人》を通して、ゴッホの芸術世界と宗教的現実の相互浸透性について考察したい。

## 哲学としてのユダヤ教とキリスト教—ギリシア文学、第四マカベア書、ヨセフス、教父

日本学術振興会特別研究員 PD (京都大学) 加藤 哲平 (Teppei Kato)

### 〈研究目的〉

本研究の目的は、ギリシア文学の中で生まれた「哲学者としてのユダヤ人」というイメージが、第四マカベア書やヨセフスら当のユダヤ人によって「哲学としてのユダヤ教」というイメージに抽象化されたあと、最後に教父らによって「哲学としてのキリスト教」へと変化していった道筋をたどることである。

### 〈学術的背景〉

「哲学者としてのユダヤ人」というイメージの創造は、ユダヤ人自身ではなく、ヘレニズム期のギリシアの民俗学者たち、たとえばテオフラストス (『敬虔について』)、ソリのクレアルコス (『眠りについて』)、メガステネス (『インド誌』) らによるものである。彼らはユダヤ人を、インドの行者やペルシアのマジと同様に、ギリシアで言うところの哲学者だと理解したのだった。ユダヤ人自身は、この哲学者としてのイメージを自己イメージに変換した。たとえば、『アリステアスの手紙』、アレクサンドリアのフィロン『賢者の自由』、『第四マカベア書』、ヨセフス『アピオンへの反論』などにその痕跡が見られる。とりわけ『第四マカベア書』とヨセフスは、「哲学者としてのユダヤ人」というイメージを「哲学としてのユダヤ教」へと抽象化している。

### 〈学術的意義〉

この「哲学者としてのユダヤ人」および「哲学としてのユダヤ教」のイメージは、キリスト教の教父たちによっても用いられている。カイサリアのエウセビオスは『福音の準備』の中で、伝統的な「哲学者としてのユダヤ人」のイメージに言及している。さらには、ユスティノスは『ユダヤ人トリュフォンとの対話』の中で、このイメージをキリスト者とキリスト教に置き換え、「哲学者としてのキリスト者」および「哲学としてのキリスト教」というイメージに作り変えた。シリアのタティアノスもまた『ギリシア人への言説』において、明らかにヨセフスの影響下で、「哲学としてのキリスト教」というイメージを用いている。これらの事例で注目すべきは、ユダヤ人ならびにキリスト者は、ギリシア人におもねるためにこうしたイメージを受け入れ、用いているわけではないということである。彼らは、自分たちがギリシア人から哲学として認められたほどに高度な思想を持つ哲学者なのだと誇っているのではなく、むしろギリシア哲学こそがユダヤ教あるいはキリスト教の下位に属するのだと、価値の転倒を図っているのである。

## 啓蒙と宗教—デカルトの哲学的言説をめぐる神学・政治的な争い

東京基督教大学 加藤 喜之 (Yoshiyuki Kato)

## 〈研究目的〉

本発表の目的は、啓蒙とキリスト教の関係を歴史的に考察することにある。とりわけ17世紀後半のネーデルランド連邦共和国におけるデカルト主義の発展に注目しつつ、真理の擁護者であった改革派教会と神学者たちがその座を追われていく姿をみていきたい。政治的な背景にも配慮しつつ、デカルト主義者と保守的な神学者たちのくりひろげた神とこの世界の関わりや、奇跡と啓示に関する論争に注目していく。

## 〈学術的背景〉

啓蒙と宗教は、長らく対立概念、あるいは相反する事象として理解されてきた。しかし近年の研究者のなかには、啓蒙をひとつの知的現象として理解するのではなく、その多様性に注目するものも少なくない。「穏健な啓蒙主義」を提唱するジョナサン・イスラエルや、「宗教的啓蒙」をうたうデイビッド・ソーキンはその代表例であろう。イスラエルの概念は、スピノザを創始者とする「革新的啓蒙主義」に対して、国家や教会と妥協した啓蒙主義者たちの考えを指す。革新的啓蒙を現代にも適用可能なイデオロギーとみなすイスラエルにとって、穏健な啓蒙主義者たちは妥協の産物にすぎないが、ソーキンはこうした宗教的な啓蒙主義者たちを肯定的に評価する。むしろこうした啓蒙主義者たちこそが啓蒙の発展に最も貢献したとさえいう。

## 〈学術的意義〉

こうした啓蒙と宗教についての新しい理解に基づきながら、17世紀後半のデカルト主義者と保守的な神学者の論争を分析することに本研究の意義はある。なかでも、これまであまり積極的に評価されてこなかった保守的な神学者たちの言説を精緻に分析することで、彼ら自身が感じていた啓蒙のもたらしうる危険性が明らかになる。彼らが問題視したのは、科学の真理性でも、教会の権威への挑戦でもなかった。むしろ、彼らにとって啓蒙の問題は、キリスト教における正統と異端についてのものだったのだ。また、1672年以降の論争に注目することで、保守派の支持するオラニエ公ウィレム三世が権力を握ったあとも、彼らの願いに反して、デカルト主義的な啓蒙がオランダの公的な教育機関で発展し続けた理由も明らかにできる。こうした分析を通して、初期啓蒙期における教会人と政治家と哲学者という相反するアクターが、啓蒙という事象の発展にどのように関与したかが明らかになるだろう。

## 前期 P. ティリッヒにおける啓示に関する二つの類型とその克服の問題—自然的啓示と超自然的啓示、その克服としての突破概念

京都大学大学院文学研究科 平出 貴大 (Hiraide Takahiro)

〈研究目的〉

本研究の目的は、ティリッヒ(1886-1965)がドイツ時代に行った『教義学講義』(1925-27)の第五命題の分析を通して、彼の啓示に関する独自の見解を明らかにすることである。このことは次の三つの課題を含んでいる。①啓示に関する二つの類型(=自然的啓示と超自然的啓示)についてのティリッヒの理解の解明、②その二つの類型に対する批判としてのティリッヒ自身の啓示理解(=突破としての啓示)の解明、③ティリッヒの啓示理解の特徴・独自性の分析。

〈学術的背景〉 本研究で扱うテキスト箇所は前期ティリッヒの中心概念の一つである「突破」概念について言及している部分であるため、ティリッヒ研究においてはしばしば取りあげられてきた。例えば Scharf は「どのように我々は啓示を経験するのか」という問いを立てた上で「突破としての啓示」に関する議論を行なっている (*The Paradoxical Breakthrough of Revelation: Interpreting the Divine-Human Interplay in Paul Tillich's Work 1913-1964*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1999)。これは主に先に挙げた課題②に該当する。また Schüßler はティリッヒの啓示理解をカトリックの(自然的啓示と超自然的啓示に関する)啓示理解と比較し、ティリッヒの見解に対する批判的視点を提示している (*Der philosophische Gottesgedanke im Frühwerk Paul Tillichs (1910-1933)*, Würzburg: Königshausen und Neumann, 1986)。この研究は先の課題①と②を含むものである。しかしそのティリッヒに対する批判は外部から導入されたものであり、必ずしもティリッヒの意図を正確に汲んだものでなく、課題①を十分に満たしていない。本研究ではテキストを可能な限り整合的に解釈することで課題①と②を遂行し、最終的に課題③を提示する。

〈学術的意義〉 『教義学講義』の第五命題はしばしばティリッヒ研究者によって言及され分析されるものの、必ずしもその議論の全体が明瞭に把握されているわけではない。これにはいくつか理由が考えられる。第一に、論の展開が不十分であり、概念の適切な選択がなされていない場合があるということ(講義録という媒体の問題)。第二に、ティリッヒの概念の使用が一般的な理解とは異なり、独自の意味合いを付け加えている場合があるということ(Schüßlerの批判はこれに基づいている)、などが理由として挙げられる。それゆえ本研究ではティリッヒの議論の展開に注意を払い、それに基づいて議論全体を整合的に解釈することを目指している。議論は次の五つの段階に区別できるように思われる。(1) 類型：啓示の二つの類型(自然的啓示と超自然的啓示)を提示し、(2) 例証：その二つの類型を思想史上の二つの具体的な立場(イデアリスムスと超自然主義)と結びつけ例証し、(3) 批判：その二つの立場を(部分的に認め、部分的に)批判し、(4) テーゼ：その批判に基づいてティリッヒ自身の立場を定式化し、(5) 再解釈：再度、彼自身の立場に基づき最初の二つの類型について解釈する。従来言及されてきたのは特に(2)～(4)についての議論であり、(1)と(5)に関しては抜け落ちている場合が多かった。本研究ではもう一度全体を検討し直し、その上でティリッヒの啓示理解の独自性を提示する。

文献： Paul Tillich, *Dogmatik- Vorlesung*(Dresden 1925-1927), *Ergänzungs- und Nachlaßbände zu den Gesammelten Werken von Paul Tillich Bd.14*, De Gruyter- Evangelisches Verlagswerk: Berlin/ New York, 2005

## シオボルド・ウルフ・トーンの教派間差別撤廃の思想をめぐる考察—アイルランドが理想としたカトリック・プロテスタント間の平等とは何か

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 三輪 摩耶 (Maya Miwa)

### 〈研究目的〉

本研究の目的は、近代アイルランドのナショナリズム運動の先駆者であり、「アイルランド共和主義の父」と呼ばれる、シオボルド・ウルフ・トーン（1763～1798年）の思想を手がかりとして、アイルランドがどのようなキリスト教のあり方を目指して独立しようとしていたのかを明らかにすることである。また、それを踏まえて、現代アイルランドにおけるエキュメニカル運動を考察する。

### 〈学術的背景〉

近年、アイルランドのナショナリズム運動についての研究が進み、その一環としてウルフ・トーンの自伝が再編、再販され（Theobald Wolfe Tone, *The Autobiography of Theobald Wolfe Tone*, Sagwan Press, 2015）、それに基づいた研究が進められている。そこでは、主に彼の政治的な偉業が評価され、彼がカトリック・プロテスタント間の平等を訴えていたことを積極的に評価しようという研究はまだ十分には見られない。しかし、彼は明らかに当時のカトリックへの差別撤廃が独立のために不可欠であるとしており、この点を抜きにして彼の思想を適切に評価することはできない。

現代のアイルランドでは未だ教派間差別が解決されておらず、エキュメニカル運動の展開も十分ではない。この状況に鑑み、アイルランド独立のための最初期の理念として、トーンによる教派間の平等の思想を再評価する必要がある。

### 〈学術的意義〉

ウルフ・トーンが理想としたカトリックへの差別撤廃の思想は、その後のアイルランドのナショナリズム運動にも受け継がれた。これらの一連の運動は政治的側面から研究される傾向があり、その背景にあったキリスト教事情について先行研究で触れられることは少ない。ナショナリズム運動が結果的に過激化し、武力行為が蔓延したことは事実であるが、20世紀にまでトーンが受け継がれていたことには着目せねばならない。なぜなら、独立後のアイルランドにおいてその理想が広く叫ばれることはなくなり、国土分割の末にカトリックが政治に深く関与してきたものの、近年、そのことに対する批判が高まってきたからである。すなわち、トーンを紐解くことは、当時のナショナリズム運動の神学的側面を明らかにするだけでなく、独立国アイルランドのキリスト教のあり方の原点に立ち戻ることによって、現代アイルランドのエキュメニカル運動を再考する契機となる。

これらのことから、本研究では、トーンを紐解くことにより、近代アイルランドのナショナリズム運動が掲げていたキリスト教のあり方の指針を示すとともに、現代において叫ばれている教派間の平等にエキュメニカル運動が寄与する方法についての提言を行う。これには、新たな見地からのトーン研究を進め、現代アイルランドのキリスト教への示唆を行うという意義がある。

## 「神の国」という問い―被災地のコミュニティ再構築の取り組みから

八戸工業大学 今出 敏彦 (Imade Toshihiko)

## 〈研究目的〉

本研究は、遺構から生活を、鎮魂から生きる方向性を求める中で被災地コミュニティ再構築の可能性を探りたい。その際、コミュニティの再構築という課題を、社会哲学・法哲学から明らかにしようとしたユルゲン・ハーバーマスの『事実性と妥当性』と、ポール・リクール『イデオロギーとユートピア』における文化的想像力の構想を参考にしながら、「鎮魂」の役割から「神の国」という問い（まだ見ぬコミュニティ再構築）を設定する。

## 〈学術的背景〉

対象地域は、地方衰退の著しい北東北であるが、まず問題は、この地で少数になった伝統文化と低被害地域は、共に忘却の危機にあり、継承と復興という課題は、どのような可能性があるのか。かつては賑わいを見せたが今は衰退の一途を辿っている場所を「遺構」と呼び、人々の記憶の中に息づいている。他方、被災地の生存者には犠牲者への思いが強く残り、犠牲者への「鎮魂」が依然として強く求められている。「遺構」から「記憶のメッセージ性」を読み解くためにオラリティという概念は、言葉では言い表しがたい人々の「共に在る」という感覚を掴むことが出来る。他方、「鎮魂」の働きには犠牲者を記憶に留めるだけでなく残された人々をも救うという「メタ認知」の特性があり、そこから生存者に失われた日常生活の方向性を取り戻させ、「復興」につなげようとする研究も存在する（金菱清（編）『呼び覚まされる霊性の震災学』新曜社 2016年）。

## 〈学術的意義〉

震災や大規模災害からの「復興」には、災害からの復興を企図したもの、そして伝統文化の復興を企図したものがある。生活者の視点における「被災・避難生活の記録」からは、災害復興は加速（前進）が求められ、伝承は継続（保存）が重視され、両者の関係はアンビバレントであることが顕在化する。そんな中で、災害を生き延びた者達の犠牲者への想いは、日常から大きく取り残される。「人間生活遺構」の「遺構」とは「人の来し方」を刻印し、今日に伝え残すメディアである。本研究がオラリティに注目するのは、人間生活遺構の持続可能性についての考察から、「遺構」は、人材育成と産業活性化の繋ぎ目としての役割があることを発見したからである。震災における「霊性」から、「復興」の前進が過去を忘却するのに対し、「鎮魂」の機能は過去を記憶し、犠牲者が「生きていたこと」のメッセージ性を持つことが確認された。かつて普通に営まれていた「人間生活」を呼び覚まし、秩序維持を図るための思想の方向を与える。本研究は、「遺構」から生活を、「鎮魂」から生きる方向性を求める中で被災地コミュニティ再構築の可能性を探り、コミュニティの再構成という課題について、文化的想像力の構想を参考にしながら、「鎮魂」の役割から「神の国」という問い（まだ見ぬコミュニティ再構築）を設定する。

## ジョン・ハワード・ヨーダーの非暴力倫理：その終末論および教会論的構造

同志社大学神学研究科博士後期課程 徳田 信 (MAKOTO TOKUDA)

## 〈研究目的〉

ヨーダーの神学にとって非暴力は核心に位置しており、それは特定の終末論と教会論の上に据えられている。その神学的構造を捉えることが本発表の目的である。まず、ヨーダーが立脚している終末論を明らかにし、そのキリスト教史における位置づけを確認する。その上で、ヨーダーが提示する非暴力論と教会の関連を考察する。なお、ヨーダーは再洗礼派の歴史研究から出発したが、今回は彼が構築した神学に限定して扱う。

## 〈学術的背景〉

一次文献：ヨーダーは主に『イエスの政治』(1972年、第二版1994年)、「終末論なき平和？」(1954年)、『ボディ・ポリティクス』(1992年)。また、ヨーダーに影響を与えたバルトやクルマン、対論相手であったラインホルド・ニーバー、そしてヨーダーに影響を受けたハワーワスの著作など。

二次文献：東京ミッション研究所編『ジョン・H・ヨーダーの神学』(2010年)やヨーダー研究者マーク・ネーションの著作(2006年)。また、ヨーダーや再洗礼派の歴史的・神学的背景を確認するためにモルトマン、トレルチ、大木英夫などの著作を用いる予定。

## 〈学術的意義〉

J.モルトマンはかつて、メノナイト派神学者ヨーダー(1927-1997)の『イエスの政治』(1972年)ドイツ語版に序文を寄せている。モルトマンはその中で、宗教改革主流派のドイツ領邦教会がこれまで再洗礼派を著しい偏見の目で見えてきたと指摘している。そして「山上の垂訓」に代表されるイエスの使信について、領邦教会が個人的内面の領域に限定して扱ってきたことに対し、再洗礼派がその使信を实际生活の次元で受け止め、非暴力の生き方を導出してきたことを評価している。

またS.ハワーワスは次のように述懐している。「ヨーダーが私に認識するよう強いたのは次のことである。すなわち、非暴力は推奨されるべきことのひとつ、すなわち、そう生きることを試みよとイエスが示唆した一つの理想などではない。そうではなく、非暴力は、威圧的力によって贖いのわざを完遂することに対する神の拒絶の中に、構造的に組み込まれている。十字架こそ『イエスの政治』なのである」(Hauerwas, Hannah's Child, 2010, p. 118)

ヨーダーはバルトやクルマンから多くを学び、再洗礼派の信仰的遺産を現代神学のコンテクストで提示した。そのようなヨーダーの非暴力論を構成する神学的背景を詳細に検討することは、ハワーワスを始めとする現代キリスト教社会倫理を考察する一つの手がかりになると思われる。